

【論文】

『論理哲学論考』と規則の問題

大谷 弘

0. 始めに

『論理哲学論考』（以下『論考』）に代表されるいわゆる前期ウィトゲンシュタインは写像理論に基づく意味論を採る実在論者であり、『哲学探究』（以下『探究』）に代表される後期ウィトゲンシュタインは意味の使用説を唱えた反実在論者であるという図式はよく言われるものである。この図式によると、いわば二人のウィトゲンシュタインが存在し、前期と後期のウィトゲンシュタインはまったく正反対の哲学を展開したということになる。

このような図式はわかりやすいし、まったく間違っているというわけではないのだけれども、もう少し考えてみる必要があると思われる。実際、『論考』と『探究』の間をつなぐ「移行期」のウィトゲンシュタイン哲学の研究が進んだこともあり、『論考』と『探究』がまったく断絶したものではなく、『論考』から連続した思考の展開の中で『探究』の哲学も成立したのだということが意識されるようになってきている⁽¹⁾。また、近年のいわゆる「新ウィトゲンシュタイン派(New Wittgensteinians)」は『論考』と『探究』をその哲学的プログラムに関して非常に近いとする新しい解釈を提示し、ウィトゲンシュタイン解釈における大きな論争点を形成している⁽²⁾。本稿は移行期ウィトゲンシュタインの解釈や新ウィトゲンシュタイン派を巡る論争には踏み込まないが、「規則」の概念に注目することで『論考』と『探究』の距離を測る一つの試みを行う。

1. ジョン・ロックの意味論と『論考』

『論考』と『探究』の距離を測るために、ここでは少し遠回りをして比較対象としてジョン・ロックの意味論を見てみることにする。ロックの意味論はいわゆる「言語論的転回」以前の悪しき意味論であり、言葉の意味を観念という私秘的な心的表象と同一視してしまっているというのも、これまたよ

く言われることである。特に分析哲学者の間では、ロックの意味論をこのように説明することは慣習のようにさえなっている⁽³⁾。だが、この図式もわかりやすいけれども、もう少し考えてみる必要がある。実際、言葉の意味が観念だとして何が問題なのであろうか？観念は私秘的で観察不可能なので、言葉の意味を観念とすると、コミュニケーションにおける言語の役割を説明できないということなのだろうか？だが、ロックは『人間知性論⁽⁴⁾』第三巻の言語論において、コミュニケーションなどの社会的な言語使用を集中的に考察している。この事実は、ロックの意味論とどのように関係しているのであろうか？

とにかく、まずロックの意味論を見てみよう。まず注意したいのは、ロックは、言葉が観念という私秘的な心の中の対象にのみ関わるとは考えていないということである。多くのロック研究者も論じているように、言葉は観念を媒介として世界へと関係付けられるとロックは考えている⁽⁵⁾。ロックにとっては言葉だけでなく観念も記号であり(E 4.21.4)、言葉は観念の意味論的作用を媒介として実在の世界を指示することができるのである⁽⁶⁾。すると、問題となる点は、観念は世界に対してどのような意味論的関係を持っているかということである。この点を理解することがロックの意味論を理解する鍵となるだろう。

近年のロック解釈では、この観念の意味論的作用を因果性に求める自然主義的な意味論をロックに帰す⁽⁷⁾。すなわち、そのような解釈によると、観念と対象の意味論的作用は、観念と対象の間の恒常的な因果関係に存しているとロックは考えているとされる。実際、例えばロックは次のように言っている。

物体の一次性質を除くすべての単純観念は存在するもののイメージや表象なわけではないということは既に示したとおりである。しかし、白さや冷たさは痛みと同様に雪の中にはないのだけれども、白さや冷たさや痛み、等々の観念は我々の外の物の力能の結果、すなわち造物主により我々の内に感覚を産出するように定められたものであり、我々の内の実在的な観念である。この観念により我々は、物自体の内にある性質を区別する(distinguish)のである。というのも、様々な[単純観念の]

現れは、この現れにより我々が関わる物を知り、区別する記号 (Marks) であるように意図されているので、観念は単に物自体の内にある何かの恒常的な結果であるにせよ、精確な類似物であるにせよ、上記の目的に同様に寄与し、[物を] 区別する實在の文字なのである。というのも、實在性は観念が實在する存在者の個別の構造との間に持つ定常的な対応 (steady correspondence) に存するのである。だが、観念が原因としての、あるいはパターンとしてのそのような構造に一致する (answer to) かどうかは問題ではない。観念が構造により恒常的に生み出されて (constantly produced) いれば十分なのである。(E 2. 30. 2)

ここで、「恒常的に生み出されている」と言うときの「生み出されている (produced)」という語はロックが因果関係に関して用いる語であり⁽⁸⁾、観念と實在の恒常的な因果関係が記号としての観念の意味論的作用を構成しているとこの箇所を解釈できるように思えるかもしれない。

だが、このような解釈を受け入れる前に、この引用箇所でもロックが何について語っているのかをもう少し慎重に検討する必要がある。というのも、この引用箇所の意図を考えるならば、観念の意味論的作用が因果性に存するとロックが主張していると解釈することはできないのである。

では、この引用箇所は何について論じているのであろうか？ロックは、『人間知性論』第二巻において様々な観念の分析を行うが、この分析は第二巻の28章までで一応終了する。だが、そこからすぐに第三巻の言語論に入るのではなく、ロックは更に第二巻の終わりに「[観念]についての別の考察を与え (E 2. 29. 1)」ねばならないとする。この第二巻の29章から33章までの最後の5章はそれまでのような個々の観念の分析ではなく、観念の身分自体についての検討を加えている箇所なのである。ロックはここで「観念が取られてきた物、あるいは、観念が表象すると想定されている物との関わりにおいて (E 2. 30. 1)」三つの区別を行う。そして、先の引用箇所はこの内の第一のもの、すなわち、實在的観念 (real ideas) と空想的観念 (fantastical ideas) の区別について論じた箇所である。實在的観念についてロックは次のように言う。

第一に、実在的観念ということで私は自然に基礎を持つ観念、実在的存在者や物の存在と対応している（have conformity with）観念、すなわち、原型（Archetypes）と対応している観念のことを意味する。自然に基礎を持たず、また、原型として観念が暗黙のうちに向けられている存在者の実在性と一致もしていない観念を私は空想的ないし妄想的観念と呼ぶ。（E 2. 30. 1）

すなわち、実在的観念とは、その観念が本来的に向かう先である原型へと対応している観念である⁽⁹⁾。従って、実在性についての説明は意味論的關係自体の説明ではなく、記号により表されるものについての説明である。ロックは単純観念、混合様相と関係の観念、実体の複雑観念についてそれぞれ異なった実在性の説明を与える。先に挙げた引用箇所はロックによる単純観念の実在性についての説明である。そこで、ロックは「実在性は観念が実在する存在者の個別の構造との間に持つ定常的な対応に存する」としていた。この「定常的な対応」が因果的關係であるのはよいとしても、ここでの問題は観念が本来的に表す「原型」は何かということであり、引用箇所の趣旨は、単純観念の原型は因果的に観念を引き起こす自然の「構造」であるというものである。先の引用箇所でロックは記号としての観念のあり方としては、観念により原型が「区別される」ということに説明の力点を置いている。すなわち、単純観念の現われは「我々が関わる物を知り、区別する記号」、「実在の文字」なのであり、そのように観念を用いて区別を行えるということに意味論的關係は存するのである。従って、単純観念に関して因果關係は意味論的關係を支える条件に過ぎず、意味論的關係自体は観念と原型の同型的対応に存すると解釈する必要があるのである⁽¹⁰⁾。

観念と原型との同型性に観念の記号作用、すなわち、意味論的作用を求めこの解釈の利点は、テキストに合っているということに加えて、単純観念以外の観念の記号作用も統一的に説明できるという点である。通常の、因果説的な解釈を採った場合、単純観念以外の観念には観念を構成する心の作用が必要となるので因果説以外の別の説明をその意味論的作用の説明として与えなければならない。しかし、観念の意味論的作用が観念と原型との同型性に存するのであれば、その取り扱いに観念ごとの違いを必要としない。ロッ

クは、混合様相と関係の観念については、観念自身が原型であり、無矛盾である限りは観念が心の中に形成されることのみによって実在性は満たされるとする（E 2. 30. 4）。すなわち、これらの観念の意味論的作用は自分自身との同型性に存するのである。また、実体の複雑観念については、その観念が外界の物において統合され、共存している通りに単純観念を集めた観念であるとき実在的であるとされる（E 2. 30. 5）。すなわち、実体の複雑観念を構成するすべての単純観念の原型が世界の中でその複雑観念のあり方に従って存在しているとき、その複雑観念は原型に対応しており実在的となる⁽¹¹⁾。従って、例えば人間の体と馬の頭を持つ理知的存在者、すなわち、ケンタウロスの観念はこの観念を構成する単純観念が実際に統一的に共存しているのを自然の中に見出すことができないので空想的な観念であるとされるのである⁽¹²⁾。このように単純観念、混合様相と関係の観念、実体の複雑観念のそれぞれの観念によって何が原型とされるのかは異なるけれども、観念が原型との同型的な対応により原型を区別することを可能とするという点では共通しており、この同型的対応に観念の意味論的作用は存するのである。

以上のようなロックの意味論は、言語が観念を媒介として我々から独立の世界、原型について語るとする点で「实在論」と呼ばれうるだろう。言語は観念を媒介にして原型に関わるとされ、この原型は、混合様相と関係の観念を除いては、心から独立であると考えられる。我々は言語をもって言語から独立に存在している世界に関わる。その際、言語の意味論的作用はその言語により表現されている観念の意味論的作用に依存しており、観念の意味論的作用自体は観念と世界の同型性に存していると考えられているのである。

このロック解釈が正しいとすると、ロックの意味論はその实在論的な側面に関して『論考』の先駆者であると言える。『論考』の基本的発想は、言葉とは世界について語ることにより意味を得るというものである（TLP 3. 12, 4. 01）。『論考』においては有意味な言語は思考を表現しており（TLP Vorwort, 4）、後に見るように言語と思考を一体不可分とする点でロックとは異なるが、言語と世界の意味論的作用自体は言語と世界の同型性に存するとしている⁽¹³⁾。より詳しく言うと、すべての複合的命題は要素命題の真理関数であり、最終的には要素命題へと分析される（TLP 5, 5. 3）。従って、話を簡単にするために要素命題に注目すると、要素命題は事態と呼ばれる対象

の配列の可能性と写像形式を共有することにより、世界を正しく、もしくは誤って写し取る（TLP 4. 25, 4. 26）。『論考』においては、名前にとって、命題に現れうるということは本質的であり、命題に現れることから独立に名前の指示を問題とすることはできない（TLP 3. 3）。同様に対象にとって、事態の構成要素となりうることは本質的であり、対象単独で指示関係を問題とすることはできない（TLP 2. 0121, 2. 014）。従って、言語と世界の写像関係は命題と事態の間でのみ問題となる。要素命題において名前は対象の代わりをし、要素命題における名前の配列に、事態における対象の配列が対応しているとき、すなわち、両者が同型的であるとき、その要素命題は当の事態を写像しているということになる（TLP 3. 203-3. 221）。すなわち、『論考』において言語と世界の意味論的作用は、命題と事態の同型性に存するのである。

このように特徴付けたとき、『論考』は一方に世界があり、他方に言語が存在し、言語は世界をその同型性により写し取ると考えている点で实在論的であると言えるだろう⁽¹⁴⁾。注意すべきは、この意味での「实在論」は『論考』において「対象」がどのような種類の物であるのかという問題からは差し当たり独立であるということである。『論考』の「対象」はカント的な意味での現象界の内部にある対象であるとする解釈（Pears 1987: 98-99）や、センスデータ（Hintikka & Hintikka 1986, 野村2006）とする解釈など様々な解釈されてきた。ウィトゲンシュタイン自身も『論考』形成期のノートにおいてはいくつかのオプションを検討している（NB14/6/15ff）。しかし、例えば対象をセンスデータであると解釈し、従って観念論的な立場として『論考』を解釈したとしても、言語が言語から独立のセンスデータについて語っているとされる限りはここでの意味での「实在論」と両立する。すなわち、言語と世界の同型性に意味論的作用を帰す限りは、その世界がセンスデータの世界であれ物理的対象の世界であれ实在論として特徴付けることができるのである。

2. ロックと規則の問題

このようにロックの意味論と『論考』の意味論の類似性を確認できたところで、ロックに戻ろう。先にも述べたようにロックの意味論は悪しき意味論

としてしばしば言及される。では、ロックの意味論の何が悪いのであろうか。あるいは、そもそもロックの意味論は悪いのであろうか。

まず思いつく批判は、ロックの意味論ではコミュニケーションが不可能になってしまうというものである。そのような批判によると、ロックにおいて観念は私秘的で他人から観察不可能なので、言語が観念の意味論的作用を媒介としている限り、話者がその言語にどのような観念を与えているのかは聞き手からは隠されているので、コミュニケーションが不可能であるという結果になってしまう。

だが、このような観念の観察不可能性に対する批判は、的をはずしていると言わざるを得ない。というのも、観念が聞き手から観察不可能であるということから、すぐにコミュニケーションが不可能であるという結論を引き出すことはできない。たとえ観念が聞き手から観察不可能であったとしても、コミュニケーションのときに話者が適切に言語に対して観念を割り当てればコミュニケーションは成立するだろう⁽¹⁵⁾。ロック自身もコミュニケーションの可能性を決して無視してはいない。特に、ロックはコミュニケーションが原理的に不可能であるという立場を採ってはいない。それどころか、ロックにとってコミュニケーションは言語使用の第一に来るものであり、他人に理解されるように言語を使用するための方策はロックの重大な関心事である（E 3.2.1, 3.11.1, etc.）。話者と聞き手が互いの言語に関して誤解しあうことにより混乱が生じるという現状の認識はあるものの、これは原理的にコミュニケーションの可能性を閉じてしまうようなものではなく、改善されるべき事態なのである。

むしろ、ロックの意味論の問題は言語と思考が分離可能であると考えていることにあるように思われる。例えば、ロックは「すべての人は語に自分の好きな観念を何であれ表させる不可侵の自由を持っており、誰も他人が自分と同じ語を使用するとき、自分が持つものと同じ観念をその他人の心の中で持つように強いる力を持っていない（E 3.2.8）」と言う。このようにロックが言うときの意図は、言語と観念の結びつきが自然的ではなく恣意的であることを強調するということにあるが、ロックの言うように言語と観念の結びつきが各人の自由に任されているのだとすると、言語と観念は本質的な結びつきを持たないということになってしまう。すなわち、言語と思考が分離可能

となってしまうのである。

この言語と思考の分離（不）可能性こそウィトゲンシュタインが『探究』の有名な規則の問題で論じたことに他ならない。『探究』の規則の問題を簡単に見ておこう。

さて143節の例に戻ろう。いま生徒は、普通の基準に基づいて判断するならば、自然数列を習得した。我々はその生徒に別の基数の列を書くことを教え、例えば「 $+n$ 」というような形の命令に対し、

$0, n, 2n, 3n, \text{etc.}$

という形の系列を書くことができるようにする。従って、「 $+1$ 」という命令には自然数列を書く。我々は、生徒に練習をさせ、1000までの数について、理解を試す抜き打ちテストをしたとする。

いま我々は生徒に1000を超えて（例えば $+2$ の）数列を続けさせる。一このとき、その生徒が、1000、1004、1008、1012と書いたとする。

我々はその生徒に、「何をしてるんだ、よく見てみろ！」と言う。—しかし、その生徒は我々の言うことを理解しない。我々は「君は2を足さないといけないんだ。どのようにして数列を始めたのか見てごらん！」と言う。—しかし、その生徒は「そうです。これでいいんじゃないですか？ こうしなければならぬんだと私は思ったんですが。」と答える。—あるいは、その生徒が数列を指して「私は同じやり方で続けています！」と言うとしてみよ。ここで「でも…がわからないのかい？」と言うことは何の役にも立たないだろう。我々はこのような場合には、例えば「我々が「1000までは2を足し、2000までは4を足し、3000までは6を足し、等々」という命令を理解するように、我々の説明によってその命令を理解することが、この人には自然だったのだ。」と言うことができるだろう。

このようなケースは、指差す手の動きによって、手首から指先の方ではなく、指先から手首の方を見るというような仕方では自然と反応するような人のケースと似ているであろう。（PI 185, [強調は原著者による]）

先生が生徒に対して「+2をせよ」という命令を与える。これに対しその生徒は、2、4、6、8、…と続けてきたが、…996、998、1000ときたところで、1004、1008、…と続けだす。先生が「何をやっているんだ。これまでと同じように続けなさい」と言う。しかし、これに対して、その生徒は、「え？これが「同じ」ってことではないんですか？」と答える。このとき、その生徒がふざけているのではないとすれば、どのようにしてその生徒に1000の次が1002でなければならないということを納得させることができるのであろうか？先生が「+2を続けよ」と言ったときには「1000」の次は「1002」であるということが念頭に浮かんでいたわけではない。もし念頭に浮かんでいたとしても、もっと大きな数では同様の問題が生じる。また、そもそも、足し算を理解するとは足し算の結果のリストを暗記することではなく、任意の数に対して適切な答えを出せるということなのである。

「+2をせよ」と言ったときの話し手の「意味する」働きや聞き手の「理解する」働きを一般的に「思考」と呼ぶとすると、この規則の問題でウィトゲンシュタインが論じている問題の一つは言語と思考の分離不可能性である。

「+2をせよ」と言ったときにはすでに数列の無限のステップを思考の内で終えていると我々は言いたくなる（PI 188, cf. 218）。しかし、我々は「+2をせよ」という命令が表現する思考によって、「1000」の次に「1002」と書くという言語使用が「決定される」という言い方に適切な意義を持たせることができない（PI 188-191）。というのも、「+2をせよ」という命令に対する正しい応答が「1000」の次に「1002」と書くことなのか「1004」と書くことなのかという問いを、経験的事実についての問いと類比的に考え、いわば数の世界についての「桁外れの事実（übermäßige Tatsache）（PI 192）」を問題として考えると考える限り、「1000」の次に「1004」と書くこともまともな選択肢とならざるを得ないのである。

事実についての命題は真偽どちらでもありうるという二極性を持ち、偶然的なことについて語っているという考えは『論考』以来のウィトゲンシュタインの前提である⁽¹⁶⁾。従って、「+2をせよ」という命令に対する正しい答えが「1002」なのか、「1004」なのかという問いを事実命題との類比で考えると、「+2」という規則によって意味されていること、すなわちこの語が表現する思考と、この思考に合致する言語使用の関係は偶然的なものとなって

しまうのである。しかし、そうであるとする「+2」の表現する思考は言語使用を説明できなくなる。ウィトゲンシュタインの論点は思考と言語の関係を偶然的なものとし、両者を分離可能にしまうと、思考が言語使用を説明できない空虚な歯車になってしまうというものなのである。

この問題への『探究』の答えは、言語使用の習得は実践における言語表現の使用技術の習得であり、規則と使用の間の「桁外れの事実」の認識ではないとするものである。我々は、規則に従うときにその規則のあらゆる解釈の可能性を検討したりはしない。むしろ、我々は盲目的に規則に従うのであって、通常の実践の中では「+2」に対する別な解釈の可能性を問題にすることとは起こらない（PI 219）。もちろん、規則の解釈が問題になる場面は存在するけれども、その場合であっても、その日常的実践の中で十分に誤解が取り除かれればよいのであって、あらゆる別な解釈の可能性を取り除かねば規則に従えないということはない⁽¹⁷⁾。「+2をせよ」という命令に対する正しい応答が「「1002」でなければならない」と言うとき、これがそのような日常的な誤解の除去でないならば、それは真でも偽でもありうるような事実についての命題ではなく、我々の実践の規則を確認する文法命題なのである⁽¹⁸⁾。

このような『探究』の議論をこれ以上検討することは本稿の課題ではない。ここでは、差し当たり、規則の問題が言語と思考の分離不可能性を問題としていることを確認できれば十分である。言語と思考の関係を偶然的なものとしてしまうと、思考は言語使用を説明できない空虚なものになってしまうというのがその論点である。そして、以上のような論点はロックの意味論に対するシリアスな批判になる。先に見たように、言語に対し観念を自由に与える権利を各人が持つということをロックは認めてしまっている。しかし、このように考えると言語と観念、すなわち思考の関係が偶然的なものになってしまうのである。

さて、では『論考』はこの言語と思考の分離不可能性についてどのような見解を採っているのだろうか。先に見たように、『論考』の意味論はロックの意味論と非常によく似ていた。また、『探究』のウィトゲンシュタインが『論考』を批判の対象としているというのはよく言われることである。では、この言語と思考の分離不可能性に関しても、『論考』はロック同様に批

判の対象となるのであろうか。

3. 『論考』と規則の問題

ここで興味深いのは『論考』においても規則の問題らしきものが議論されているということである。その議論は論理命題について論じた箇所に登場する。ウィトゲンシュタイン『論考』6.1節以下で論理の命題の特徴づけを行う。

論理の命題はトートロジーである。（TLP 6.1）

それゆえ、論理の命題は何も語らない（sagen Nichts）。（それらは分析命題である。）（TLP 6.11）

論理の命題がトートロジーであるということは、世界の形式的・論理的な性質を示す。

このようにそれらの命題の構成要素を結合するとトートロジーが生じるということは、それらの構成要素の論理を特徴付けている。

命題が特定の仕方¹で結合されトートロジーを生み出すためには、命題は構造上の特定の性質を持つていなければならない。このように命題を結合するとトートロジーが生じるということは、従って、それらがそのような構造上の性質を持つということを示している。（TLP 6.12, [強調は原著者による]）

このように、この箇所でウィトゲンシュタインは論理の命題がトートロジーであり、それらはトートロジーであることにより世界の形式的性質を示していると論じている。そして、引用箇所の少し後で、ウィトゲンシュタインは次のように言う。

ここから、我々は論理的命題なしでやっていけるということになる。というのも、我々は適切な表記法においては命題の形式的性質をその命題を単に見ること（Ansehen）によって認識することができるのである。（TLP 6.122）

例えば、二つの命題「 p 」と「 q 」が「 $p \supset q$ 」と結合されてトートロジーを生み出すならば「 q 」が「 p 」から帰結することは明らかである。

例えば、「 q 」が「 $p \supset q$ 」から帰結することを我々はこれらの両者の命題自身から見て取る（*ersehen*）。しかし、我々はそれらの命題を「 $p \supset q$ 、 $p : \supset : q$ 」と結合し、これがトートロジーであると示すことによってまた同じことを示すことができる。（TLP 6.1221）

例えば、「 $(p \rightarrow q) \wedge p$ 」という命題を手にしていれば、ここから「 q 」が帰結するというのを我々は「見て取る」ことができる⁽¹⁹⁾。「 $((p \rightarrow q) \wedge p) \rightarrow q$ 」という論理命題は、ここで見て取られていることと実質的に同じことをトートロジーという形で示しているに過ぎない。従って、論理命題なしですすすことも我々には可能である。このようにウィトゲンシュタインはこの箇所で論じている。

これが規則の問題への『論考』流の解決であると解釈するのは自然なことだろう。「+2 をせよ」という命令に従うならば、「1000」の次に「1002」と書かねばならないのはなぜかという『探究』の問いは、ここでは「 $(p \rightarrow q) \wedge p$ 」を認めたら、なぜ我々は「 q 」が帰結することを認めねばならないのかという問いにより論じられている。そして、この問いに対する『論考』の答えは、そのことは「見て取られる」、あるいはトートロジーにより「示される」というものである。すなわち、「 $(p \rightarrow q) \wedge p$ 」から「 q 」が帰結すること、あるいは「1000+2」が「1002」となることは語りえず示されるものであり、シンボルから見て取られることなのである。

では、ここで見て取られ、示されているものは何であろうか？それは、先に引用した6.12、6.122節にあるように、言語の形式的性質、従って、世界の形式的性質である。従って、『論考』において規則の問題はより広く形式的性質や形式的関係を巡る問題の一つとして議論されているのである。

ここで、論理命題の身分という論理の哲学に属する特殊な話題は、規則の問題という言語表現一般を巡る問題とは別の問題ではないかと思われるかもしれない。論理命題がトートロジーであるということはそれ自体で独立した話題であり、一般的に言語表現を支配する規則とはどのようなものかと問う規則の問題とは切り離して扱われうるのではないだろうか。このような疑問

は、確かにもっともであり、論理命題をトートロジーであると考えるかどうかということと、規則の問題をどう扱うかは差し当たり別のことでありうる。しかし、目下のところ重要なのは『論考』においては両者の問題は連続的であるということである。『論考』において、論理命題はトートロジーであり、無意義 (sinnlos) ではあるけれども、無意味 (unsinnig)、つまりナンセンスではない (TLP 4.461, 4.4611)。従って、論理命題に関して、無意義な命題により世界の形式的性質が示されているという特殊性を『論考』は認めている。しかし、トートロジーではなく、この形式を「 $p \rightarrow q$ 」と「 p 」からは「 q 」が帰結する」と語ろうとすると、その結果はナンセンスな命題となる (TLP 6.1264)。そして、この示されるべきことである形式的性質や形式的関係を語ろうとすると、その結果はナンセンスな命題となるという構造は意義を持つ命題とトートロジーとで違いはない。有意義な命題はその使用において自身の形式的性質を示している。そして、この形式的性質について語ろうとすると、結果はナンセンスな命題となるのである。

ウィトゲンシュタインは『論考』においてこの形式的性質や形式的関係を内的性質、内的関係として論じる⁽²⁰⁾。ウィトゲンシュタインによると、性質は対象がその性質を持たないということが思考不可能なとき内的である (TLP 4.123)。従って、関係は二つ以上の対象や事実の間にその関係が成立しないことが思考不可能なとき内的であるということになる。そして、この内的性質および内的関係についての議論は、論理形式は命題により語りうるものではなく、示されるものであるという議論の中で登場する。

命題はすべての現実を描写しうるが、その現実を描写するために自身
が現実と共有せねばならないもの、すなわち論理形式を描写することは
できない。(TLP 4.12)

命題は論理形式を描写できない。論理形式は命題の内に反映されて
いる。

言語の内に反映されていることを言語は描写できない。

言語の内に自身を表すものを我々は言語により表現することはで
きない。

『論理哲学論考』と規則の問題（大谷）

命題は現実の論理形式を示す。

命題はそれを現す。(TLP 4. 121, [強調は原著者による])

示されうることは語られえない。(TLP 4. 1212, [強調は原著者による])

すなわち、世界自体ではなく、言語により世界について語ることを可能としている世界や言語の形式は語りえず、言語の使用の内に示されねばならないというのがこの4. 12節以下でのウィトゲンシュタインの論点である。そして、この箇所はまた「命題は事態の成立と不成立を描写する(TLP 4. 1)」という箇所へのコメントである⁽²¹⁾。すなわち、命題は世界の像として、それが真、あるいは偽であったら事態がどのようなものであるのかということを示しているところの箇所でウィトゲンシュタインは論じている⁽²²⁾。ところで、ウィトゲンシュタインによると、この命題は世界の中の事態について語っているという特徴からは、命題が真でも偽でもありうるという真偽の二極性を持たねばならないという論点が帰結する。すると、この内的関係に関するウィトゲンシュタインの議論を次のように整理することができるだろう。すなわち、(1) 命題は世界について語るものであり、従って、真偽の二極性を持つ。(2) ところが、内的性質や内的関係に関してはその性質や関係を主張する命題が偽であるということは思考不可能である。(3) 従って、内的性質や内的関係は命題によっては語りえない。

『論考』のウィトゲンシュタインは言語を形式的な記号の体系と考えており、言語内の命題は世界へと関係付けられることで意味を得ていると考えていた。ところが、この命題は世界や他の命題と単に事実的ではない仕方に関係しているのでなければならないという強い認識がウィトゲンシュタインにはあった。すなわち、言語と思考は分離不可能であり、言語とそれに意味を与えている世界、そして言語使用は非偶然的な仕方に関係していなければならないということをウィトゲンシュタインは認識していた。しかし、言語にとっては偶然的な世界内の事態について語るというあり方が本質的なので、この関係について語ろうとすると、その関係は偶然的、従って、事実的なものになってしまうのである。

この内的関係を巡る問題は、言語を支える形式に関わるあらゆる場面で問題となる。例えば、名前はそれが表す対象と内的な写像関係にある（TLP 3. 221, cf. 4. 243）。『論考』の名前は日常的に我々が名前と呼ぶものとは異なるが、日常の名前を用いて説明すると、例えば、「シロ」という名前を理解するときには、これを単なる音声ではなくまさに目の前の犬の名前として理解せねばならない。もし、「シロ」が別の犬の名前であったとしたら、それはもはや同音異義語であり別の名前である。従って、「シロ」がどの犬の名前かわからない人は「シロ」という名前を理解したとは言えないのである。あるいは、命題はそれが表す事態と内的関係にある（TLP 4. 024, 4. 03）。「机の上にコップがある」という命題を理解する人はこの命題が真であったらどのような事態が成立しているのかを理解するのであり、この命題の意味を理解したが、それでもこの命題を真とする事態がどのようなものかわからない、ということはいえぬ。

このような問題と並んで規則の問題も『論考』に登場する。「 $(p \rightarrow q) \wedge p$ 」から「 q 」が帰結することを認めないとしたら、それは「 p 」、「 q 」「 \wedge 」、「 \rightarrow 」といった語に通常とは異なる意味を与えているということになるだろう。しかし、「 $(p \rightarrow q) \wedge p$ 」からは「 q 」が帰結する」と語ることが有意味であるとする、有意味な命題は真偽両極を持つので、「 $(p \rightarrow q) \wedge p$ 」からは「 q 」が帰結しない」可能性もまともな可能性として認めなければならないということになってしまうのである。

そして、これらの問題に対する『論考』の解決策は「語る／示す」という区別を導入することであった。すなわち、内的性質や内的関係は世界の中の構成要素ではなく、従って、命題によって語られうるようなものではない。それは、命題の内に示されるものであり、命題から見て取られるべきものである。このように、言語は世界に関わることにより意味を得るという論点を維持したまま、『論考』は「語る／示す」の区別により、内的性質や内的関係を巡る問題を回避しようとしたのである。

4. 結論：『論考』と『探究』の距離

さて、では結局『論考』と『探究』の距離はどの程度のものなのだろうか？

『論理哲学論考』と規則の問題（大谷）

ここまで見たように、言語と思考は分離不可能な内的関係にあるという洞察は『探究』だけでなく、『論考』にもある。この言語と思考の分離不可能性をどのように理解するのかという点に対して両者は異なった結論を出す。しかし、両者における規則の問題はこの同じ問題を論じたものである。我々の意味し、理解する働きから独立に、単に世界と対応するだけでは、言語は意味を得ることができないとウィトゲンシュタインは『論考』においても考えている⁽²³⁾。言語は我々の思考可能性の制約の下にあるのである。この限りで、『論考』はロックの実在論よりも、いわば反実在論に近づく。

しかし、『論考』には、我々から独立の世界に関わることで言語は意味を得るとする考えが強くあるのも確かである。例えば、『探究』同様に、『論考』においても、ウィトゲンシュタインは「適用 (Anwendung)」という語を使い言語使用に言及する。

記号において表現されないものを記号の適用 (Anwendung) が示す。
記号が包み隠したものを記号の適用が顕わにする。(TLP 3. 262)

命題のみが意義 (Sinn) を持つ。命題という連関の中でのみ名前は意味 (Bedeutung) を持つ。(TLP 3. 3)

しかし、この使用への言及は言葉が我々から独立の世界に関わることで意味を得るとする考えの放棄ではない。確かに、『探究』同様に、言語と思考が分離されると、思考は言語使用を説明できない空虚なものとなると『論考』は考えている。しかし、この問題への『論考』の解決策は先にも見たように、この言語と思考の調和は使用に「示される」というものである。そして、この言語と思考の調和はそれらと世界の調和でもある。例えば、名前は対象の代わりとなることにより意味を得るのであり、名前がどの命題にどのような仕方で見えようかという可能性は、対象がどの事態に見えようかという対象自体の持つ形式を名前が共有することにより成立するものなのである。すなわち、対象という世界の「実体」の可能性が思考や思考を表現する言語の可能性を与えるものであり、これらの調和が言語使用に示されるというのが『論考』の立場なのである。そして、これは、未だ実在論的な発想を強く残

『論理哲学論考』と規則の問題（大谷）

すものであるだろう⁽²⁴⁾。

- ⁽¹⁾ 「移行期」に注目した比較的早い時期の研究としてはKenny(1973)が代表的である。
- ⁽²⁾ 新ウィトゲンシュタイン派については、Crary and Read (2000)所収の諸論文を見よ。
- ⁽³⁾ 古いものではAlston(1964): 22-28がある。日本語で書かれたものでは、例えば、丹治(1996): 1-5がある。また分析哲学以前にもロックの言語論に対する批判はある。代表的なものはバークリの批判である(Berkeley, 1998: Intro., 20)。
- ⁽⁴⁾ 『人間知性論』への言及にあたっては、冒頭にEを付し、該当箇所を巻・章・節番号で指示する。
- ⁽⁵⁾ Kretzman (1968), Ashworth (1984), 長尾 (2007)等を見よ。
- ⁽⁶⁾ ロックは言語だけでなく、観念も判断の働きにより心的命題を構成するとしている (E 4.5.5, 4.5.6)。
- ⁽⁷⁾ 例えば、Ayers (1991): 40ff. ファーガソンは因果性に加えて神によるデザインという目的論的要素を加えた意味論をロックに帰し、ロックをミリカンによる目的論的意味論の先駆者としている (Ferguson 2001)。またOtt(2004)もファーガソンの解釈を支持している。
- ⁽⁸⁾ 例えば、「任意の単純観念や複雑観念を生み出す (produce) ものを我々は原因という一般名で表記し、生み出される (is produced) ものを結果と表記する。
(E 2.26.1) 」
- ⁽⁹⁾ ロックは原型とは「心が観念をそこから取って来たものと想定し、観念に表させようと意図し、観念を向ける (E 2.31.1) 」ものであると説明する。ロックは、観念は心によって①他人の観念、②実在、③実在の本質と合致させられるとする (E 2.32.5)。このうち、②は原型のことであるが、①と③については、それぞれ、話し方の適切さの問題 (E 2.30.4)、妄想的な想定 (E 2.32.18) とされているので、観念は本来的に原型に関わると考えることができる。
- ⁽¹⁰⁾ 関連する論点としてロックの逆転スペクトルについての扱いを見よ (E 2.32.15)。
- ⁽¹¹⁾ 本稿の解釈によると同型性は意味論的作用を成立させるのであって、実在性を成立させるのではない。従って、実体の複雑観念において意味論的作用が存する同型対応を理解するためには、原型が実際に世界の中で成立している必要はなく、その複雑観念が実在的であったならば、どのような原型が成立しているのかとい

『論理哲学論考』と規則の問題（大谷）

う区別を行うことができれば十分である。

- (12) もちろん、ケンタウロスの観念は矛盾しているわけではないので、今後この観念に対応する存在が発見されれば、実在的であったということになる (E 2.30.5)。
- (13) Hacker(1981)を見よ。
- (14) ここでの『論考』の実在論の特徴付けはペアーズに従うものである。ペアーズは『論考』について、「…『論考』は次のような意味で基本的に実在論的(basically realistic)である。すなわち、言語は表層面においてはいくつかのオプションを持つが、深層に潜ると対象の内在的な本性に基礎を置いている。この内在的な本性は我々の創り出したものではなく、神秘的な独立性を持ち我々に課されるものである。(Pears 1987: 8)」としている。
- (15) もちろん、ここで言葉に対して適切な観念を与えとはどういうことかという問題はあある。一つの考え方は、自分がその言葉を聞いたときに通常思い浮かべる観念を言葉に与えているとき、言葉に対して適切に観念を与えているとするものだろう。例えば、いま他人が「赤い」と言うときに自分が通常持つ観念を「赤の観念」と呼ぶとする。すると、自分がこの「リンゴは赤い」と言うときにもその赤の観念を「赤い」という語に割り当てることが適切だということになる。この説明の問題は、他人が「赤い」と言うときにどのような観念を持っているかは観察不可能なので、結局のところお互いが同じ言葉に同じ観念を与えているのかわからなくなるとことにあり、従って観念の観察不可能性にあると言われるかもしれない。すなわち、ある人が「赤い」という語を自分とまったく同じように使用しているとしても、その人がどのような観念を持っているかはわからないということになるというのである。しかし、この場合の問題は、観察不可能性よりは、むしろ言語使用から独立にそのような観念の差異を認めることにあるのであって、後に見る言語と思考の分離可能性に帰着するように思われる。
- (16) Hacker(1981)を見よ。
- (17) この点についてはOhtani (2009)を見よ。
- (18) 先にも述べたように、ロックも言語実践の現場を重視している。しかし、『探究』のウィットゲンシュタインが、実践から切り離された個人の心の中の働きを非本質的であると考えのに対し、ロックはそのような個人の心の中の働きについて語ることが意味をなすと考えている点に決定的な違いがある。
- (19) 『論考』の論理記号の表記は現代の表記と異なる。本稿では引用部分を除いては

『論理哲学論考』と規則の問題（大谷）

現代的表記を用いる。

- ⁽²⁰⁾ ウィトゲンシュタインは「形式的性質」や「形式的関係」という語と「内的性質」や「内的関係」という語をほとんど交換可能なように使っているように思われる。

（例えば、TLP 4.124を見よ。）以下では、「内的性質」、「内的関係」という語を用いて議論を進める。野村は『論考』の形式的関係（性質）を六種類に分類している。（野村2006: 40-56を見よ。）

- ⁽²¹⁾ そして、この4.1節は更に「思考とは有意義な命題である（TLP 4）」という箇所へのコメントである。

- ⁽²²⁾ TLP 4.021, 4.022も見よ。

- ⁽²³⁾ コーラ・ダイヤモンドは『論考』に私的言語論が存在するとし、その論点を言語により経験の限界を超え私的対象について語りうるとするラッセル的な考え方の批判に求めている（Diamond 2000）。本稿の『論考』解釈は、単に私的対象に限らず、一般的に思考可能な対象の領域を言語により超え出ることとはできないとする主張が、「規則の問題」という仕方では『論考』の中に存在しているとするものである。

- ⁽²⁴⁾ 石黒ひでは上記の3.3節から『論考』を反実在論的に解釈している（Ishiguro 1969）。しかし、本稿の立場は、『論考』が言語使用に注目する反実在論的な傾向を持つことは認めるものの、依然として我々から独立の世界との同型対応に意味論的な根拠を求める実在論的立場を保っているというものである。

・ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）の著作およびその略記

PI: *Philosophical Investigations*, G.E.M. Anscombe and R. Rhees (ed.), second edition, Oxford: Blackwell, 1958.（言及箇所は節番号で指示する。）

NB: *Notebooks 1914-1916*, G.H. von Wight and G.E.M. Anscombe (ed.), second edition, Oxford: Blackwell, 1979.（言及箇所は日付で指示する。）

TLP: *Tractatus Logico-Philosophicus*, London & New York: Routledge, 1922（言及箇所は節番号で指示する。）

・その他の著作

Alston, William P. (1964) *Philosophy of Language*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, Inc.

『論理哲学論考』と規則の問題（大谷）

- Ashworth, E. J. (1984) “Locke on language”, *Canadian Journal of Philosophy*, Vol.14, reprinted in R. Ashcraft (ed.), *John Locke: Critical Assessments*, Vol.4, London & New York: Routledge: 235-258, 1991.
- Ayers, Michael (1991) *Locke: Epistemology and Ontology*, London & New York: Routledge.
- Berkeley, George (1998) *A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge*, J.Dancy (ed.), Oxford: Oxford University Press.
- Crary, Alice and Read Rupert (ed.) (2000) *The New Wittgenstein*, London & New York: Routledge.
- Diamond, Cora (2000) “Does Bismarck has a beetle in his Box? – The private language argument in the *Tractatus*”, in Crary and Read (2000): 262-292.
- Ferguson, Sally (2001) “Lockian teleosemantics”, *Locke Studies*, Vol.1: 105-122.
- Hacker, Peter (1981) “The rise and fall of the picture theory”, in *Perspectives on the Philosophy of Wittgenstein*, I. Block (ed.), Oxford: Basil Blackwell: 85-109, reprinted in *Ludwig Wittgenstein: Critical Assessments*, Vol.1, S. Shanker (ed.), London: Croom Helm: 116-135.
- Hintikka, Merrill B. and Hintikka, Jaakko (1986) *Investigating Wittgenstein*, Oxford: Blackwell.
- Ishiguro, Hide (1969) “Use and reference of names”, in *Studies in the Philosophy of Wittgenstein*, Peter Winch (ed.), London: Routledge & Kegan Paul: 20-50.
- Kenny, Anthony (1973) *Wittgenstein*, Oxford: Blackwell.
- Kretzmann, Norman (1968) “The main thesis of Locke’s semantic theory”, *The Philosophical Review*, Vol.77: 175-196.
- Locke, John (1975) *An Essay concerning Human Understanding*, Peter H. Nidditch (ed.), Oxford: Clarendon Press.
- 長尾栄達 (2007) 「ロック言語論における事実と規範」、『イギリス哲学研究』、第30号、97-109.
- 野村恭史 (2006) 『ウィトゲンシュタインにおける言語・論理・世界：『論考』の生成と崩壊』、ナカニシヤ出版.
- Ohtani, Hiroshi (2009) “Use, understanding and explanation of meaning”, *The*

『論理哲学論考』と規則の問題（大谷）

Proceedings of the 3rd BESETO Conference of Philosophy, UTCP & DALs: 191-200.

Ott, Walter (2004) *Locke's Philosophy of Language*, Cambridge: Cambridge University Press.

Pears, David (1987) *The False Prison*, Vol.1, Oxford: Oxford University Press.

丹治信春(1996)『言語と認識のダイナミズム』、勁草書房.